

漢語上古音の-r-介音(3)  
—CI-の想定と単子音化の条件—

吉池孝一 中村雅之

単子音化の条件

吉池：Jaxontov氏は1960年の論文<sup>1</sup>で、中古音における来母の偏った分布および来母に関わる諧声系列の偏った分布により、上古音に二重子音CI-を想定し、第二成分のIが落ちた結果として中古音の2等韻の枠組みができたとした。李方桂(1971;1982)はJaxontov氏の着想によりながら、第二成分はIではなくrであるとしたわけです。それは、中古の舌音2,3等及び歯音2等を“そり舌音”と再構し、そのそり舌音の成立を説明するために上古音のIをrに替えたことによるものでした。しかしながら、われわれは前回の検討で、中古の舌音2,3等は“舌面音”であった可能性が高く<sup>2</sup>、わざわざCr- (任意の子音をCと表記する) とする必要はなくCI-のままでもよいとしました。

中村：今回は、CI-としたならばどのような問題が起こるかを検討するということですね。

吉池：上古音に二重子音のCr-もしくはCI-を認めたとして、中古音ではCもしくはr,Iのいずれかが消失し単子音となります。二重子音から単子音への変化について検討することになります。

中村：まずはKarlgren(1957;1987)<sup>3</sup>、李方桂(1971;1982)<sup>4</sup>を確認したいですね。

吉池：李方桂(1971;1982)が提示した談部の枠組みと中古音を利用し、その横に両氏の音価を

---

<sup>1</sup> Яхонтов,С.Е(1960). Сочетания согласных в древнекитайском языке. *Труды XXV Международного конгресса востоковедов*. 5. Доклады делегации СССР. 原論文は未見。ここでは華訳「上古漢語的複輔音声母」による。謝・葉・雅洪托夫著 唐作藩 胡双宝選編(1986)『漢語史論集』北京：北京大学出版社、42-52頁。本対談では簡略に従い「Jaxontov(1960)」として言及する。

<sup>2</sup> この点は平山久雄(1993;2005)「用声母腭化因素 \*j 代替上古漢語的介音 \*r —對上古舌齒音聲母演變的一種設想」(『平山久雄語言學論文集』北京：商務印書館、84-102頁。1993年開催の第26回国際漢藏語言学会で読み上げた論文によるとある。本対談は2005年による)と同様。

<sup>3</sup> Karlgren,B.(1957), *Grammata Serica Recensa*. Stockholm:The Museum of Far Eastern Antiquities.1987年のリプリント版による。

<sup>4</sup> 李方桂(1971)「上古音研究」『清華學報』新第9卷第1—2期合刊。『上古音研究』商務印書館、第1版1980年。第2次印刷1982年による。

並べてみましょう<sup>5</sup>。これで概略を知ることができるでしょう。

等と 開合	No.	漢字	李氏の中古音	両氏の上古音	
				Karlgren	李方桂
1等開口	1	甘	kâm	<i>kâm</i>	kam
	2	敢	kâm	<i>kâm</i>	kamx
	3	藍	lâm	<i>glâm</i>	glam
	4	談	dâm	<i>d'âm</i>	dam
	5	暫	dzâm	<i>dz'âm</i>	dzamh

等と開合	No.	漢字	李氏の中古音	両氏の上古音	
				Karlgren	李方桂
2等開口	6	監	kam	<i>klam</i>	kram
	7	巖	ngam	<i>ngam</i>	ngram
	8	讒	dzam	<i>dz'am</i>	dzram
			dzãm	<i>dz'ãm</i>	dzriam
	9	斬	tšãm	<i>tsãm</i>	tsriam
10	鹵	kãm	---	kriamx	

等と 開合	No.	漢字	李氏の中古音	両氏の上古音	
				Karlgren	李方桂
3等開口	11	嚴	ngjəm	<i>ng ĵãm</i>	ngjam
	12	俺	•jəm	---	•jam
	13	欠	khjəm	<i>k' ĵãm</i>	khjam
	14	眨	pjäm	<i>pĵiam</i>	pjiam
	15	檢	kjäm	<i>klĵiam</i>	kljiamx
	16	驗	ngjäm	<i>nglĵiam</i>	ngljiamh
	17	淹	•jäm	<i>•ĵiam</i>	•jiam
	18	占	tšjäm	<i>t' ĵiam</i>	tjam
	19	覘	tjäm	<i>t' ĵiam</i>	trjam
	20	厭	•jäm(?)	<i>•ĵiam</i>	•jiam

<sup>5</sup> 李方桂(1971;1982)の音価の-xは中古音上声に対応し、-hは中古音去声に対応する。しかし、-xや-hが付されず、切韻系韻書の声調と一致しないものが少なくない。董同龢氏の『上古音韻表稿』とも一致しない。ここにあげた談部の資料だけでも5つある。これが単純なミスプリントであるのか、それとも何か意図があるのか不明。

	21	鹽	jiäm	「？」とする	grjam
	22	炎	jäm (異化作用)	djam	gwjam >jwam
	23	織	sjäm	sjam	sjam
3等 合口	24	泛	phjwem	p'jwäm	phjamh
	25	凡	bjwem	b'jwäm	bjam

等と開合	No.	漢字	李氏の中古音	両氏の上古音	
				Karlgren	李方桂
4等開口	26	兼	kiem	kliam	kliam
	27	恬	diem	d'jam	diam

両氏の違いは No.3 藍、No.6 監、No.7 巖、No.8 讒によく表われています。

No	李氏の中古音	上古音	Karlgren	李方桂
3	1等 藍 lâm		glâm	glam
6	2等 監 kam		klam	kram
7	2等 巖 ngam		ngam	ngram
8	2等 讒 dzam	dz'am	dzram	

中村：藍 lâm と監 kam は声符を共有するわけですが、上古の二重子音を Karlgren は Cl-と Cl-で、李方桂は Cl-と Cr-で表記し分けていますね。

吉池：2等韻をみると、Ka 氏は諧声系列を成すもののみ（監 *klam*）に-l-を認め、李氏は2等韻のすべて（監 *kram* 巖 *ngram* 讒 *dzram*）に-r-を認めます。この点は両者が大きく異なるところですが、このような李氏の処置は Jaxontov(1960)の着想を参考にしたものでしょう。

中村：Ka 氏は上古音の有声音に、有声有気と有声無気の二種を想定するわけですが、No.8 讒 *dz'am* の *dz'*（'で有声有気音を表記する）や No.25 凡 *b'jwäm* の *b'* や No.27 恬 *d'jam* の *d'* はいずれも有声有気音、No.3 藍 *glâm* の *g* や No.22 炎 *djam* の *d* は有声無気音です。二重子音のいずれが落ちて中古の単子音となるかは有声音の音質と関係するのですが、その点、この例だけではわかりません。いま少し資料を追加してながめてみたいものです。

### Karlgren 氏の場合

吉池：資料の追加ということですが、李方桂(1971;1982)から幾つか字を拾って加えるとともに、李方桂(1971;1982)にない「檻」と「廉」を新たに補填すると次のようになります。

上古の部	中古の等と声母	Karlgren の上古音
談部 藍	(1 等来母)	<i>glâm</i>
監	(2 等見母)	<i>klam</i>
檻	(2 等匣母)	<i>g'lam</i>
廉	(3 等来母)	<i>glïam</i>
兼	(4 等見母)	<i>kliam</i>
中部 降	(2 等匣母)	<i>g'ông (g'lông?)</i>
隆	(3 等来母)	<i>gliông</i>
* 降の再構音は単子音であったか二重子音であったか断定されていないようである。		
文部 吝	(3 等来母)	<i>mliæn</i>
談部 驗	(3 等疑母)	<i>ngliam</i>
幽部 謬	(3 等明母)	<i>mliög</i>

Ka 氏は、上古の有声子音に、有気 *g'* の系列と無気 *g* の系列を設定し、CI-の C が有声有気音 (*g'lâm, g'lông*) および無声音 (*klam*) のばあい I が落ちて中古音で C-となり、C が有声無気音 (*glâm*) のばあい C が落ちて中古音で I-となるとします。上古音に二種の有声音を設定するところがおもしろいですね。

中村：Karlgren(1954)<sup>6</sup>によると、上古の有声無気音の系列に *g d dz á (b)* を設け、有声有気音の系列に *g' d' dz' dz' á' b'* を設けます。*g d dz á (b)* は中古音では消失し、*g' d' dz' dz' á' b'* のみとなります。これに対して、李氏は上古音でも中古音でも一系の有声音のみを設け気音の有無は問題としません。したがって、上古音で同じ有声音の記号を使っている Ka 氏と李氏とでは記号の働きが異なります。

吉池：そもそも Ka 氏はどうして二種の有声音を設定したのでしょうか。

中村：漢語現代方言の状況を説明するため先ず中古の有声破裂音と有声破擦音を無気ではなく有気と見なしました。後の研究者は中古音では音韻論的に有声無気と有声有気の対立がないことから、Ka 氏の説を採用せず、中古の有声音に関しては有気音の記号を取り去ってしまいました。しかし、Ka 氏が求めたものは音声そのものでしたから、この点は譲れないものだったと思います。そして中古に有声有気の破裂音と破擦音を認めたならば、それにつながる上古に有声有気の破裂音と破擦音を設定するのは自然な成りゆきです。他方、藍 *glâm > lâm* のように中古で消失する有声の破裂音や破擦音の方を有声無気としたということでしょう。

<sup>6</sup> Karlgren(1954) *Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese*. The Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm. 1970 年のリプリント版による。

吉池：監 *klam* > *kam* や檻 *g'lâm* > *yam* のばあい CI-の l が落ちて C が残り、藍 *glâm* > *lâm* のばあい CI-の C が落ちて l が残ると考えたわけですが、中古音で痕跡が残らない C を g (有声無気音) として設定する必要があるのでしょうか。最初から単子音の l のままでいいように思うのですが。

中村：そうすると、監檻と藍が諧声系列をなす理由を見いだしにくいのでしょうか。kl-, g'l- と l が諧声系列を成すとしたならば、{さまざまな子音+l} という音節があるなかで、なぜ kl- と g'l- が選ばれたか説明がつきません。kl-, g'l- と gl- (単子音の l ではない) であるならば互いに調音位置が同じなので諧声系列を成すとしても無理はありません。

吉池：なるほど。それで消失するほうの子音に有声無気音を想定したわけですね。Ka 氏は、この有声無気音を、CI-の C 以外にも幾つかの音の表記に利用しています。喻母 4 等の d- や音節末子音などです。いずれも中古音で消失するから、消失しやすい音質であったということになりますね。

中村：そのことについては「烏弋山離とアレクサンドリア (3) — 「弋」と「離」の音価—」(『KOTONOHA』第 197 号, 2019 年 4 月) の「弋」(喻母 4 等) の音価 d- のところで述べたことですが、もしも、Ka 氏の有気の定母 \*d'- [d<sup>h</sup>] を硬音 (fortis)、無気の喻母 4 等 \*d- [d] を軟音 (lenis) とみてよいならば、後者の軟音の \*d- [d] の方がどちらかというに変化し消失しやすいということになります。そこでは喻母 4 等の d- のみについて言及しましたが、その他の有声無気音 (g dz á (b)) も軟音 (lenis) とみてよいでしょう。

吉池：消失しない有声有気音のほかに、消失する有声無気音 (おそらく軟音) を設定するというのは、なかなか巧妙です。しかし、CI-の C が鼻子音 (ng, m) のばあい注意が必要です。驗 *ngljam* > *ng-*、繆 *mliöğ* > *m-* のように、ふつうは l-の方が落ちます<sup>7</sup>。しかし吝 *mlijan* > *l-* のように鼻子音が落ちるばあいもあります。鼻子音が落ちる例はこの 1 例のみですから例外として処理していいのですが、なぜ例外がおこるのか説明が必要です。今後の課題ということにしましょう。

中村：つぎに李氏を確認しましょう。

---

<sup>7</sup> Karlgren (1957) *Grammata Serica Recensa* にある CI-のうち C が鼻子音であるものは次のとおり。CI->l-は、475 吝 \**mlijan* > *liën-*。CI->C-は、613 驗 \**ngljam* > *ngiäm-*、855 鷓 \**ngliek* > *ngiek*、1032 睦 \**mliök* > *mliuk*、1069 繆 \**mliöğ* > *mliêu*、繆 > *mliêu-*、1114 卯茆昂 \**mlôg* > *mau-*、質 \**mlug* > *mäu-*、1125 \*樂 *nglök* > *ngák*、\*樂 *nglök* > *ngau-*。

## 李方桂氏の場合

吉池：「Karlgren 氏の場合」の举例において、李方桂(1971;1982)にない「檻」と「廉」を新たに補填しました。ここでは予想される檻と廉の李方桂氏の音を（ ）で括り提示します。

上古の部		中古の等と声母	上古音	
			Karlgren	李方桂
談部	藍	(1 等来母)	<i>glâm</i>	glam
	監	(2 等見母)	<i>klam</i>	kram
	檻	(2 等匣母)	<i>g'lam</i>	(gram)
	廉	(3 等来母)	<i>glïam</i>	(gljam)
	兼	(4 等見母)	<i>kliam</i>	kliam
中部	降	(2 等匣母)	<i>g'lông?</i>	grəngw
	隆	(3 等来母)	<i>gliông</i>	gljəngw
宵部	樂	(1 等来母)	<i>glâk</i>	nglakw
	櫟	(4 等来母)	<i>gliok</i>	nqliakw(?)
文部	吝	(3 等来母)	<i>mljən</i>	mljiənh
談部	驗	(3 等疑母)	<i>ngliam</i>	nglijamh
幽部	謬	(3 等明母)	<i>mljög</i>	mljiəgwh

中村：Jaxontov(1960)は中古の 2 等韻の枠組みに収まる字のすべてに 1 介音を想定した。李氏は Jaxontov 氏の着想を受け入れつつ、1 を r に替えて、2 等韻のすべてに r 介音を設定した（監 kram 檻 gram 降 grəngw）。李氏は、1・3・4 等になる字には-l を認め、2 等韻になる字には r 介音を認めたわけですが、l と r という二種の音を認めた利点はなんでしょう。

吉池：Karlgren 氏は上古に二種の有声音を認め、監 *klam* > *kam* や檻 *g'lâm* > *gam* のように C が無気音と有声有気音のばあいには Cl の l が落ちて C が残り、有声無気音 (*glâm*) のばあい Cl の C が落ちて l が残るとした。そうすると、檻(2 等) *g'lam* 降(2 等) *g'lông* と藍(1 等) *glâm* 廉(3 等) *glïam* 隆(3 等) *gliông* のように、声母部分の区別が可能になる。前者については l が落ち C が残り、後者は C が落ち l が残ると説明することができます。

李氏は有声音を一種とし、有声音が落ち、無声音が残るとした。そうするとそのままでは、檻(2 等) *glam* 降(2 等) *glông* と藍(1 等) *glâm* 廉(3 等) *glïam* 隆(3 等) *gliông* のように、声母部分の区別はなくなり単子音化の説明が困難となる。しかし、2 等に r 介音を認め r 介音は中古で消失するとしたので、檻(2 等) *gram* 降(2 等) *grəngw* と藍(1 等) *glam* 廉(3 等) *gljam* 隆(3 等) *gljəngw* のように、両者の区別が可能になる。前者は r が落ち C が残り、後者は C が落ち l が残ると説明することができるようになったということです。これが l と r を区別した利

点でしょう。

中村：李氏は中古 2 等韻の舌音はそり舌音であると想定したので、中古で 2 等韻となるすべての字に r 介音を認めたならば、そり舌化を無理なく説明することができます。これも李氏の立場では、介音を r とした利点ですね。

l のほかに r 介音を設定するというのは妙案ではありますが、Cl-と Cr-が問題なく諧声系列を成しえるのか気にかかるところです。李方桂(1971;1982)は諧声系列を成す条件として二つあげます<sup>8</sup>。(一) 調音位置が同じ破裂音 (p,ph,b など) は互いに諧声系列をなす。(二) 舌尖破擦音 (ts, tsh, dz) や摩擦音 (s) は互いに諧声系列をなすが、舌尖破裂音 (t, th, d) とは諧声系列をなさない。以上の二つですが、l と r は破裂音でも破擦音でもなく、調音位置が同じかどうかという点についても微妙なところです。

吉池：r と表記される音は可動域が広くさまざまな調音位置と調音方法があるので、その点について李氏はどのように考えたのか言及がほしいところです。なにも言わずに素通りするわけにはいかないと思うのですが。

ところで、Cl-の C が鼻子音 (ng, m) のばあい、どちらの子音が落ちるかという問題があります。Ka 氏のばあいは通常 l が落ち、例外として C が落ちる (1 例のみ) と理解することができます。李氏のばあい C が落ちることを例外とするわけにはいきません。樂 nglakw > l-、櫟 ngliakw(?) > l-、驗 ngljiamh > ng-、吝 mljienh > l-、謬 mljiægwh > m- とあるので、C が落ちるか l が落ちるか予測できません。l と r が諧声系列を成すかという問題とともに、鼻子音についても難点といえ難点です。

中村：われわれは、2 等韻のすべてに r 介音を設定した李氏には従わず、Jaxontov(1960)にもどって、2 等韻のすべてに l 介音を想定するので、1,2,3,4 等に Cl-を想定することになります。そうすると、①Cl-の C と l はどのような条件で落ちて単子音となるのか、②そもそも Cl-の l は介音なのかそれとも二重子音の一方なのかという問題がでできます。

## Cl-の想定

吉池：まず①Cl-の C と l はどのような条件で落ちて単子音となるのかということについて検討しましょう。李氏の 2 等韻の r 介音を単に l 介音に置き換えただけでは、「檻 glam」(2 等韻) と「藍 glam」(1 等韻)、あるいは「降 glangw」(2 等韻) と「隆 gljængw」(3 等韻)

---

<sup>8</sup> (一) 上古發音部位相同的塞音可以互諧。

(a) 舌根塞音可以互諧，也有與喉音 (影及曉) 互諧的例子，不常與鼻音 (疑) 諧。

(b) 舌尖塞音互諧，不常跟鼻音 (泥) 諧。也不跟舌尖的塞擦音或擦音相諧。

(c) 唇塞音互諧，不常跟鼻音 (明) 相諧。

(二) 上古的舌尖塞擦音或擦音互諧，不跟舌尖塞音相諧。 (10 頁)

において、中古までにそれぞれ前者で1が落ち、後者で1が残る条件が見いだせないこととなります。

中村：Ka氏は、{C(有声有気音および無声音)+l-}のばあい1が落ちてCとなる。{C(有声無気音)+l-}のばあいCが落ちてlとなる、としました。この想定に論理的な瑕疵は見当たりません。今のところはKa氏にしたがうということではいかがでしょう。

吉池：Jaxontov(1960)の着想とKa氏の二種の有声音を合体させるということですね<sup>9</sup>。上古音>中古音とし、本対談の有声有気音をC'で表記すると次のようになります。

	Karlgren	李方桂	本対談
談部			
藍 (1等来母)	<i>glâm &gt; lâm</i>	<i>glam &gt; lâm</i>	gl->l-
監 (2等見母)	<i>klam &gt; kam</i>	<i>kram &gt; kam</i>	kl->k-
檻 (2等匣母)	<i>g'lam &gt; γam</i>	( <i>gram &gt; γam</i> )	g'l->γ-
廉 (3等来母)	<i>gliam &gt; ljäm</i>	( <i>gljam &gt; ljäm</i> )	gl>l-
兼 (4等見母)	<i>kliam &gt; kiem</i>	<i>kliam &gt; kiem</i>	kl>k-
中部又は冬部			
降 (2等匣母)	<i>g'lông? &gt; γång</i>	<i>grængw &gt; γång</i>	g'l->γ-
隆 (3等来母)	<i>gliông &gt; ļung</i>	<i>gljængw &gt; ļjung</i>	gl->l-

中村：これは確認ですが、Ka氏は2等韻のすべてにCl-を認めるのではなく諧声系列に関わる字のみにCl-を認めるわけですが、われわれはJaxontov(1960)に沿って2等韻のすべてに1介音を認めるわけですね。

吉池：そういうこととなります。表現を変えれば、介音1の脱落によって中古の2等韻が形成されるということです。Cl-のCが有声無気音の場合にはCが脱落して、中古の1・3・4等韻の来母になり、Cが無声音および有声有気音の場合には1の脱落によって2等韻になる訳です。

<sup>9</sup> 参考までに下記の三文献が上古の二重子音Cr-(Ka氏はCl-とする)をどのように処理し中古の単子音とするかについて確認すると次のようである。Baxter, W. H. 1992(*A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter)はハイフンの有無によるC-r->l-とCr->C-で、Schuessler, A. 2009(*Minimal Old Chinese and Later Han Chinese*. Honolulu: University of Hawaii Press)は単子音r->l-とCr->C-で表記し分ける。Baxter, W. H. & Sagart, L. 2014(*Old Chinese: A New Reconstruction*. Oxford University Press)は概略であるがハイフンとピリオドを付したC-r->l-, C.r->l-と記号を付さないCr->C-、および咽頭化子音のr (Cr<sup>s</sup>-のr)と介音のr (C<sup>s</sup>r-のr)を区別することによって表記し分ける。ただしハイフンとピリオドは形態素とかかわるものであるから、われわれの音の議論とは同列に論ずることはできないかもしれない。上記三文献はいずれもCの音質に言及することはない。



### Jaxontov(1960)に沿った説

吉池：Jaxontov(1960)に沿った説をまとめるとつぎのようになります。

	上古音	中古音
1 等韻	C+V1	>C+V1
	CI+V1 (諧声系列を成す)	> I+V1
2 等韻	CI+V1	>C+V2
	CI+V1 (諧声系列を成す)	>C+V2

このばあい、2 等韻の CI-の I が、どのように V1 を V2 とするか問題となります。

中村：Jaxontov(1960;1986)<sup>10</sup>によると、上古の 1 介音は、後代に何らかの半母音もしくは母音（おそらく e）と代わり、その半母音もしくは母音が主母音の変化を引き起こしたとあります。

再晩一些時候，二等字的介音 I 被某個半元或者元音（可能是 e）取代，後者又反過來引起主要元音的變化。（46 頁）

吉池：半母音もしくは母音の e というのは、王力氏が想定した上古の e 介音を意識したものでしょうね。

但是上古時期不同於中古時期，一等與二等的差別跟韻部毫無關係，一個韻部中通常四個等的字都有。因此一等與二等的字未必會有不同的元音，它們更可能是依介音區分的，王力主張後説，他把二等字的介音構擬爲 e（或者在合口字中用 o 代替 u）。（45 頁）

中村：Jaxontov 氏は、中古の 2 等韻の主母音は 1 等韻に比べて舌位が前よりであるとする説を支持していますので、上古の 1 介音は後続する主母音の前舌化を引き起こす要素を持っていたと考えていたはずで

吉池：Pulleyblank(1962)は、Jaxontov(1960)の 1 介音説の紹介に先立ち、ラテン語の I がイタリア語で i と現れる例を紹介しています<sup>11</sup>。fiore < florem。あるいはこのような例も Jaxontov 氏の頭の中にはあったかもしれませんが、1 介音を契機として前接する子音を口蓋化し後続する母音を前舌化することについて、一目瞭然というわけではありません。この点については課題ですね。

<sup>10</sup> 引用は華訳による。唐作藩 胡双宝選編(1986)「上古漢語的複輔音声母」『漢語史論集』北京：北京大学出版社、42-52 頁。

<sup>11</sup> This seems inherently improbable—one would expect a medial -i- not to simply disappear but to become vocalized in some way, as has happened for example in Italian *fiore* < Latin *florem*. There have indeed been attempts to associate some of the medial -i- of Middle Chinese with the loss of -l- but no good correlation can be made with the other evidence for clusters. (p.110)

中村：ところで 1,2,3,4 等に Cl-を認めるとして、この l は介音でしょうか、それとも二重子音の一方でしょうか。李方桂氏は 1,3,4 等に二重子音として Cl-を、2 等に介音として r を設定し両者を区別しました。われわれは、これを Cl-一本にまとめたわけですが、そうすると介音か二重子音の一方かという問題が生じます。

吉池：これまで、この問題を曖昧にして議論をすすめてきましたが、Cl-の l が無条件で落ちるのではなく、C の音質を条件としていずれか一方が落ちると考えるからには、二重子音の一方としたほうが理にかなっているのではないのでしょうか。

中村：それでは Cl-を二重子音と考えることにしましょうか。これまでの研究者は声母表の中に二重子音を挙げていませんでしたが、二重子音となれば、いずれは上古音の声母の体系の中に組み込む必要がありますね。

#### 平山久雄 (1993;2005)に沿った説

中村：ところで、2 等韻の解釈については Jaxontov(1960)以外にもう一つ可能性があるのではないですか。

吉池：どういうことでしょうか。

中村：前回とり上げた平山久雄(1993;2005)の説です。平山氏は中古 2,3 等韻の舌音はそり舌音ではなく舌面音とし、その舌面音を引き起こす要素として口蓋化要素 j (介音として j を設定するわけではない) を上古音に設定します。この口蓋化要素 j は後続する主母音にも影響し、中古 2 等韻の枠組みを作ることとなります<sup>12</sup>。なお、1 と諧声系列を成す 2 等韻は Clj-とします。

	上古音	中古音
1 等韻	C+V1	>C+V1
	Cl+V1 (諧声系列を成す)	> l+V1
2 等韻	Cj+V1	>C+V2
	Clj+V1 (諧声系列を成す)	>C+V2

吉池：Clj-はこれ全体で声母というわけですね。ところで、2 等韻の Cl-の l は諧声系列を成

---

<sup>12</sup> 若用 \*j 來代替 \*r, 當然不能如此單純地說明這些問題。對此我寧願再繼續研究, 但也覺得並非沒有辦法。例如把“監”擬做 \*kljam (\*kl 是複輔音聲母) 也可以說明 \*l 的消失: 齶化的[l]音是有點難發的(參看本文 § 1.2 末尾所述[l]與[j]構音上的矛盾), 要是[l]給齶化因素[j]的舌位讓路, 那就自己也會變成[j]了。(98 頁)

すものみに設定し、2等韻のすべての音節に *lj* を設定するわけではないとしていいのでしょうか。

中村：その点は明示されていませんが、文脈からみてそういうことでしょうか。もっとも、すべて *Clj*-であるとしても特段の不都合はないと思います。

吉池：平山氏のように2等韻に声母の口蓋化要素 *j* を想定するならば、中古の2,3等韻の舌音を舌面音とすること、また主母音が前よりになることについて一目にして瞭然ですね。

中村：平山氏の説は魅力的ですが、二重子音に関わる部分について、平山久雄(1993;2005)の最後において付論のように提案されており全貌を知ることができません。

吉池：われわれはどちらを採るかということですね。これは一般論としてですが、前に出された説で説明が可能であるあいだは前説を維持し、それが否定されたときに新説に替えるという「カタツムリのような歩み」があってもいいのではないのでしょうか。

#### おわりに

中村：両説を維持しながら、とりあえずは *Jaxontov*(1960)を採るということですね。そうすると次のようになります。

① *Jaxontov*(1960)により中古2等韻の枠組みに収まる音節のすべての声母に上古音で *Cl* を設けるが、*Cl*-の *l* は介音ではなく二重子音の一方とする。

② *Karlgren* 氏により二種の有声音を認め、*Cl*-のうち *C* が有声有気音もしくは無声音のばあい *l* が落ち、*C* が有声無気音のばあい *C* が落ちるとする。

吉池：*Cl*-の *C* が鼻子音 (*ng*, *m*) のばあい、どちらが落ちるかという点については今後の課題ですね。

中村：「漢語上古音の-r-介音」というテーマで始めた対談は今回でおおよそその結論に達しました。新派が想定する-r-介音の是非を検討したのですが、我々の結論は、いわば *Jaxontov*(1960)の段階への差し戻しということになります。それに付随して来母の音価も当然 *r*-ではなく、*l*-のままということになるので<sup>13</sup>、新派の再構音からはだいぶ距離を置くことになりました。

---

<sup>13</sup> 平山久雄 2006 (「上古漢語の音素体系」『中國語學研究 開篇』25, 1-23頁) は上古音の音素目録に *l* を登録するが *r* はない。同氏も中古の来母 *l* は上古の *l* に由来するとみていることがわかる。なお当該論文は複声母の問題には立ち入らないという方針で書かれたものであり、平山久雄(1993;2005)で提案があった *Clj*-の進展について知ることはできない。

上古の有声破裂音（有気と無気の対立）については中古音への変遷など検討すべきことは少なくありません。あらためて検討したいものです。